

ロンドンオリンピックにおける
選手育成・強化・支援等に関する検証チーム

報 告 書

平成 24 年 11 月

<目次>

1. はじめに.....	1
2. 競技結果等について.....	2
(1) ロンドンオリンピックについて.....	2
(2) 競技結果について.....	2
3. 国立スポーツ科学センター（JISS）について.....	4
(1) 概要.....	4
(2) 事業の状況.....	4
(3) 活用状況.....	6
4. ナショナルトレーニングセンター（NTC）について.....	10
(1) 概要.....	10
(2) 事業の状況.....	10
(3) 活用状況、活用競技のメダル獲得と入賞状況.....	11
5. マルチサポート事業について.....	14
(1) アスリート支援の状況と評価.....	15
(2) マルチサポート・ハウスの状況と評価.....	18
(3) 競技用具等研究開発の状況と評価.....	21
6. おわりに.....	26
参考資料.....	28

1. はじめに

2012（平成 24）年 7 月 27 日から 8 月 12 日まで 17 日間にわたって、ロンドンにおいて第 30 回オリンピック競技大会（2012／ロンドン）（ロンドンオリンピック）が開催された。

オリンピック選手の育成・強化を図るため、各競技団体は、「スポーツ振興基本計画（平成 12 年 9 月 13 日文部科学省）」（期間：平成 13 年度～平成 23 年度）に基づき、競技者育成プログラムを作成し、一貫指導システムの構築に努めてきたところであり、このシステムがその後に整備されていくナショナルトレーニングセンター（NTC）における事業・活動へと結実されていった。また、2011（平成 23）年 6 月、「スポーツ振興法（昭和 36 年法律第 141 号）」の全面改正により「スポーツ基本法（平成 23 年法律第 78 号）」が制定され、2012（平成 24）年 3 月には「スポーツ基本計画（平成 24 年 3 月 30 日文部科学省）」（期間：平成 24 年度～）が策定された。これにより、今後 10 年程度を見通した今後 5 年間の計画も示された。

今大会は、2008（平成 20）年 1 月に全面供用された NTC において、4 年間をかけて選手の育成・強化が行われて臨んだ初のオリンピック競技大会であるとともに、マルチサポート事業によるスポーツ医・科学、情報分野等からアスリート支援及び競技用具・器具の研究開発に取り組み、選手村の近くに試合直前まで選手のリカバリー・コンディション調整等を行えるマルチサポート・ハウスを設置した初めてのオリンピック競技大会である。

日本人選手が、自らの限界に挑み、全力で競技に取り組んでいる姿は日本中に感動を巻き起こした。

本報告書は、今回のロンドンオリンピックの競技結果の分析と、前回の第 29 回オリンピック競技大会（2008／北京）（北京オリンピック）後、今大会までの選手育成・強化・支援等に関する「国立スポーツ科学センター（JISS）」、「ナショナルトレーニングセンター」、「マルチサポート事業」の効果等について検証したものである。

2. 競技結果等について

(1) ロンドンオリンピックについて

ロンドンオリンピックは26競技302種目で行われ、我が国からはそのうち、24競技175種目で参加した。日本代表選手団編成数は、男子選手137名、女子選手156名、コーチ等役員225名の計518名であった。

(2) 競技結果について

日本代表選手団の成績は、金メダル7個、銀メダル14個、銅メダル17個の計38個で史上最多であった。これに加えて4位から8位は計42であり、メダル数と合わせた入賞総数も計80と史上最多であった。また、メダルを取った競技数が史上最多の13競技であり、メダルに繋がる競技が広がった。

表1 日本代表選手団のロンドンオリンピックのメダル・入賞結果

区分	金	銀	銅	4位	5位	6位	7位	8位	計
数	7	14	17	5	15	7	8	7	80
	38			42					

(出典) 文部科学省調べ

金メダルの獲得数は、第28回オリンピック競技大会(2004/アテネ)(アテネオリンピック)の16個、北京オリンピックの9個から今大会の7個と減ったが、今大会では史上初のメダル獲得や、久しぶりのメダル獲得なども見られ、バレーボール(女子)、サッカー(女子)といったチームスポーツや水泳(男子・女子リレー)、フェンシング(男子団体)、アーチェリー(女子団体)、卓球(女子団体)といった団体競技でのメダル獲得が目立った。

このため、大会期間中は、閉会式の日まで連日のメダル獲得が報じられることとなり、国民のオリンピックへの関心がさらに高まった。

表2 我が国の1992年以降の入賞数及びメダル獲得競技数

開催都市(開催年)	入賞数			メダル獲得競技数
	メダル獲得数	4~8位	計	
ロンドン(2012)	38	42	80	13
北京(2008)	25	52	77	8
アテネ(2004)	37	40	77	10
シドニー(2000)	18	42	60	6
アトランタ(1996)	14	36	50	7
バルセロナ(1992)	22	41	63	7

(出典) 文部科学省調べ

また、今大会の金メダルランキングでは、我が国は 11 位だったが、メダル獲得総数では、1 位アメリカ (104 個)、2 位中国 (88 個)、3 位ロシア (82 個)、4 位イギリス (65 個)、5 位ドイツ (44 個) に次いで 6 位であった。

表 3 ロンドンオリンピックの金メダルランキング (1 位から 11 位まで)

(単位：個)

順位	国名	金	銀	銅	合計
1	アメリカ	46	29	29	104
2	中国	38	27	23	88
3	イギリス	29	17	19	65
4	ロシア	24	26	32	82
5	韓国	13	8	7	28
6	ドイツ	11	19	14	44
7	フランス	11	11	12	34
8	イタリア	8	9	11	28
9	ハンガリー	8	4	6	18
10	オーストラリア	7	16	12	35
11	日本	7	14	17	38

(出典) 文部科学省調べ

この結果を踏まえ、スポーツ基本計画に掲げられた目標の達成状況は、次のとおりであった。

表 4 スポーツ基本計画における目標及び達成状況

目標	達成状況
過去最多を超えるメダル数の獲得	達成
過去最多を超える入賞者数	達成
金メダル獲得ランキング 5 位以上	未達成

(出典) 文部科学省調べ

スポーツ基本計画における政策目標の達成状況は、「過去最多を超えるメダル数の獲得」については達成、「過去最多を超える入賞者数」についても達成、「金メダル獲得ランキング 5 位以上」については未達成であった。

なお、これらのメダル獲得数は競技ごとに数えられているが、例えばダブルス競技、チーム競技、団体競技等では、競技に参加した選手に対しメダルが授与される。このメダリスト数で数えると、金が 7 名、銀が 44 名、銅が 33 名の、延べ 84 名となり、実人数でも 76 名となる。これは、選手団 293 名の約 26% であり、約 4 人に 1 人となる。また、そのうち、女子選手は 50 名、選手団女子 156 名のうち、メダルを手にしたのは 32%、約 3.1 人に 1 人であった。

3. 国立スポーツ科学センター（JISS）について

(1) 概要

JISS は、我が国の国際競技力向上を図るため、スポーツ医・科学研究推進の中核機関として、2001（平成 13）年に独立行政法人日本スポーツ振興センター（JSC）の内部機関として設置され、研究成果を踏まえた科学的トレーニングやスポーツ障害に対する医学的サポート、スポーツに関する各種情報の収集・蓄積・提供などを一体的に行っている。

主要施設には、スポーツ科学研究施設（バイオメカニクス実験室、ボート・カヌー実験場、環境制御実験室等）、スポーツ医学研究施設（MRI 検査室、CT 検査室、診察室等）、スポーツ情報研究施設（映像編集・分析室、スポーツ情報サービス室等）、科学的トレーニング施設（研究体育館、トレーニング体育館、射撃練習場等）、サービス施設（低酸素宿泊室、研修室、サッカー場等）がある。

写真 1 JISS 施設全景



写真提供 独立行政法人日本スポーツ振興センター（JSC）

(2) 事業の状況

JISS では主に次の 7 つの事業を行っている。

①スポーツ医・科学支援事業（アスリートチェック）

選手のパフォーマンスに直接的・間接的に影響を及ぼすと考えられる基礎的、共通的な項目及び種目ごとに対応した項目について、スポーツ医・科学に基づく検査・測定を行い、競技力の向上に資する科学的情報をコーチや選手等に提供する。実施内容は、メディカルチェック、フィットネスチェック、心理チェック及び栄養チェックの 4 つに分かれており、事前に中央競技団体（NF）と十分協議し、種目を考慮して測定項目を選定している。

②スポーツ医・科学支援事業（医・科学サポート）

フィットネス、トレーニング指導、栄養、心理、動作分析、レースゲーム分析、映像技術サポート、情報技術の 8 分野からなる支援事業を実施している。NF の要望を受けてプロジェクトチームを編成し、我が国のトップアスリート及びチームの国際競技力向上に向けた活動に対し、検査・測定データの分析結果に基づく実践的な示唆を提供するなど、スポーツ医・科学、情報の各側面から組織的・総合的・継続的な支援を

写真 2 動作分析（医・科学サポート）



写真提供 JSC

行っている。

③スポーツ医・科学研究事業

NF スタッフや国内外の研究者・研究機関と連携しながら、競技スポーツの現場で早急に科学的な解明が求められる内容を中心に、種目に特化した研究から種目横断的に活用できる知見を生み出す研究まで行っている。例えば、高地・低酸素トレーニング研究により、コンディショニングの調整能力を高めたり、研究開発した映像データベースを構築して対戦競技や格闘技で活用したりするなど、国際競技力の向上に有用な知見や方策を生み出す調査・研究を行う。

④スポーツ診療事業

トップアスリートのスポーツ外傷、障害及び疾病に対し、競技スポーツに通じた7診療科のスポーツドクターやアスレティック・トレーナー等が診療、リハビリテーションを行うことにより、選手のコンディションを良好な状態に維持・回復させ、オリンピック競技大会をはじめとする各種国際競技大会において最高の競技力を発揮できるよう支援する。また、公益財団法人日本オリンピック委員会（JOC）の医学サポート部会と連携して、競技現場を含めたネットワーク作りを積極的に行う。

写真3 スポーツ診療事業



写真提供 JSC

⑤スポーツ情報事業

国内外のスポーツ関係機関とのネットワークを活用して、各種のスポーツ情報の収集・分析・蓄積・提供を行うとともに、スポーツ情報のセンターとしての機能を確立・強化する。

⑥スポーツアカデミー支援事業

文部科学省、JOC、公益財団法人日本体育協会、NF等が国際競技力の向上を目的として実施する講習会等に対して、JISSの研究員等を講師として派遣し、より効果的な講習会等が実施できるよう支援する。

⑦サービス事業

JISSに設置されたトレーニング施設及び宿泊施設の有効活用並びにバランスの取れた食事の提供等を行い、国際競技力向上を目指すJOC及びNF等が行う強化育成活動を支援するとともに、屋外施設の利活用を促進し、スポーツの振興を図る。

(3) 活用状況

これらの事業は、2008（平成 20）年 1 月からの NTC 中核拠点の全面供用により可能となった集中トレーニングと併せて実施できるようになったことで、選手の育成・強化・支援に効果を生んでいる。

また、JISS 独自の外部評価機関である「国立スポーツ科学センター業績評価委員会」の平成 23 年度事後評価票においても、例えば、医・科学系サポートでは、バスケットボール、自転車、ウエイトリフテ

ィングのように研究事業の成果を活用するサポートが数多くみられるようになったことや、情報技術者の登用により、柔道、体操のように短時間で有効な情報をフィードバックできるようになったこと、スポーツ診療事業では、ロンドンオリンピックに向けて、NF ドクターとの連携を密にするための JISS-NF ドクター協議会を開催したことなどが評価され、「計画を十分に履行し、着実に成果をあげている」との評価を得ている。

このように、JISS による選手サポートは、NF や外部評価機関からも一定の評価をされているが、JISS のようなトップアスリートを支援する機関においては、我が国最高のサポートスタッフが選手に対して効果的でより高度なサポートが展開できるよう、今後、こうした事業とその体制を充実させていく必要がある。

また、トップアスリートの中には潜在的に故障を抱えている選手も多く、中には競技に支障を来す場合もあるが、スポーツ診療事業のメディカルチェックによる早期発見や、診療での所見に基づく、クリニック・リハビリでの選手の支援により、競技への支障を大きく軽減している。

なお、理学療法士などの専門スタッフによるリハビリテーションも、全体的には評価が高いが、スタッフの定員枠や任期制などによる担当者の途中交代などの課題もある。

JISS のアスリートチェックは、2008（平成 20）年以降 1,000 人を超える利用者があった。

写真 4 栄養指導食堂



写真提供 JSC

表5 JISSによるアスリートチェックの実施結果（H20～23）（単位：人）

区分	H20		H21		H22		H23	
	NF 要望	派遣前	NF 要望	派遣前	NF 要望	派遣前	NF 要望	派遣前
ロンドンオリンピック実施競技	317	333	468	621	433	761	486	525
上記以外の競技	371	194	334	266	251	559	321	78
計	688	527	802	887	684	1,320	807	603
	1,215		1,689		2,004		1,410	

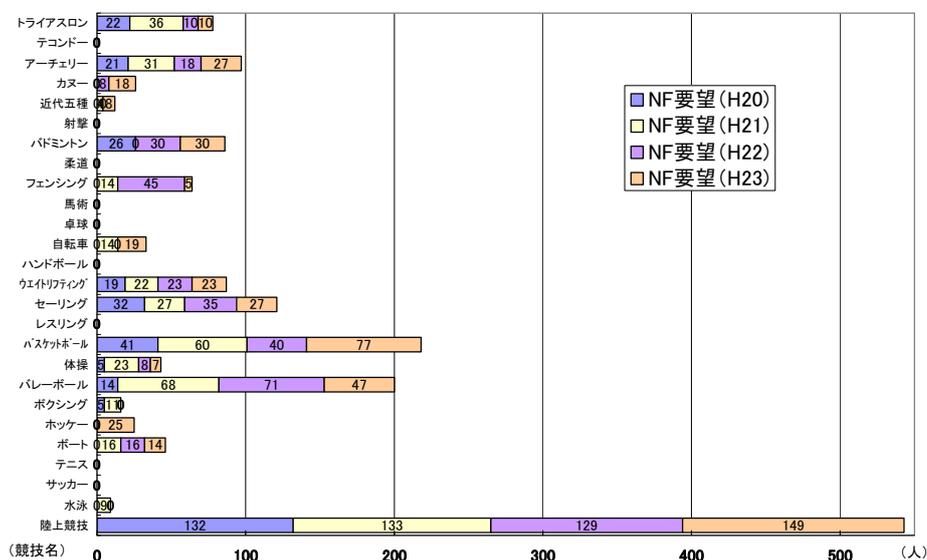
NF 要望：NFからの要望により、メディカル、フィットネス、心理、栄養の面からトータルに測定・検査を行うもの。

派遣前：JOCからの要望により、オリンピックやアジア競技大会等への派遣前に実施するもの。

（出典）JSC 調べ

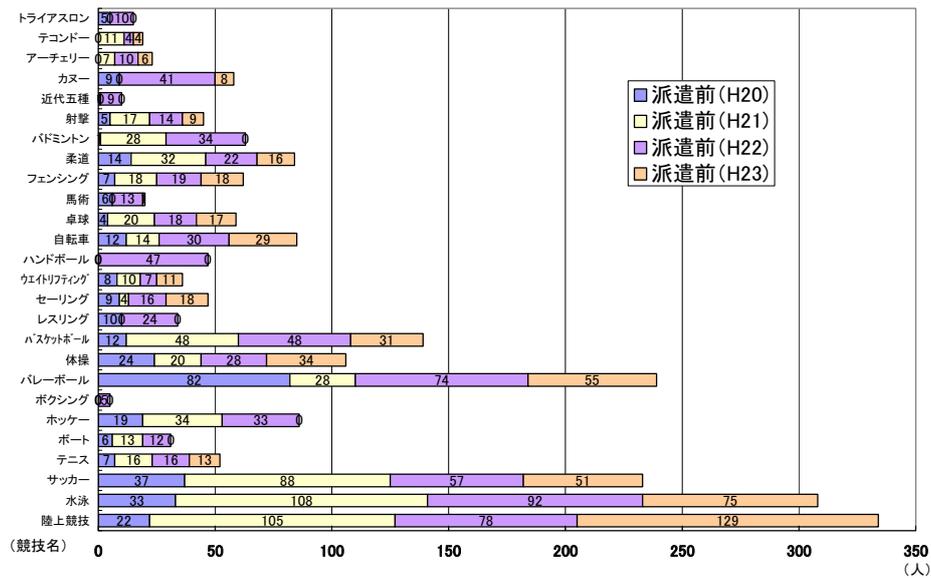
アスリートチェックについては、トライアスロン、アーチェリー、バドミントン、フェンシング、自転車、ウエイトリフティング、セーリング、バスケットボール、体操、バレーボール、ボート、陸上競技で「派遣前」はもちろん、「NF 要望」の段階から積極的に活用されている。

図1 JISSによるアスリートチェックの競技別内訳（NF 要望）（単位：人）



（出典）JSC 調べ

図2 JISSによるアスリートチェックの競技別内訳（派遣前）（単位：人）



（出典）JSC 調べ

JISSによる診療事業の受診件数の合計は、2008（平成20）年の13,066件から2011（平成23）年の15,210件に増加している。一方、受診の対象者であるJOC強化指定選手はここ数年約1,600人程度で推移しているため、JISSでの利用がより進んでいるといえる。

表6 JISSによるスポーツ診療事業の診療部門別受診件数内訳（単位：件）

診療部門	H20	H21	H22	H23
内科	1,908	1,749	2,569	2,944
整形外科	3,121	2,787	2,742	3,061
リハビリテーション	6,618	5,814	6,099	7,647
歯科	659	717	660	810
眼科	124	139	100	36
耳鼻科	61	54	51	89
婦人科	93	135	131	152
皮膚科	259	217	207	253
心理カウンセリング	116	137	143	64
栄養	107	145	88	154
合計	13,066	11,894	12,790	15,210

（出典）JSC 調べ

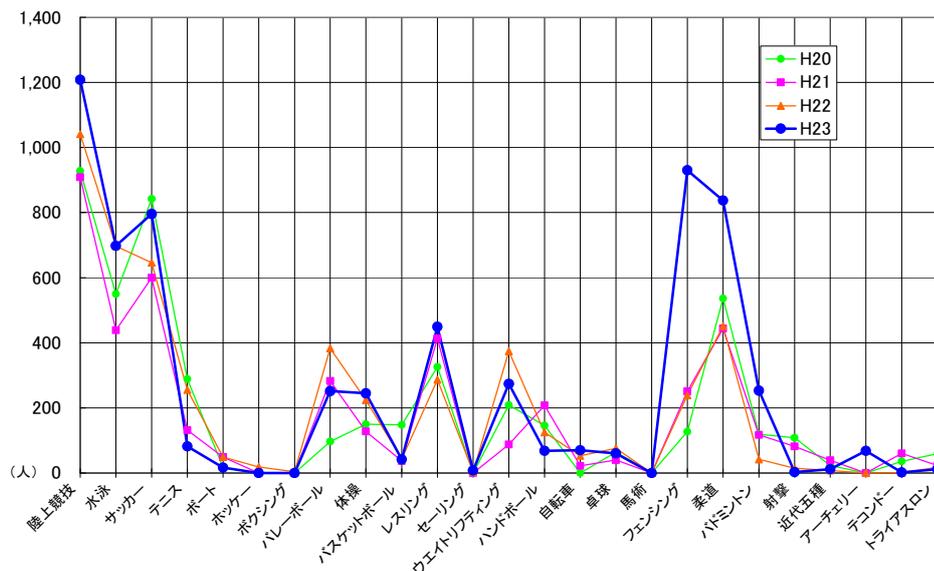
そのうち、最も利用されているリハビリテーションについては、平成 23 年度の場合、陸上競技が全体の 15.8%、フェンシング 12.2%、柔道 10.9%、サッカー 10.4%、水泳 9%、レスリングが 5.9%を占めている。

またこの他、200 人以上が利用している競技は、バレーボール、体操、ウエイトリフティング、バドミントンであり、これらの競技は、サッカー以外はいずれも NTC を拠点とする競技である。

平成 23 年度にリハビリテーションの利用が増加しているのは、オリンピック前のコンディション調整のための利用者増も考えられる。トップアスリートが、外部と切り離された空間でリハビリテーションに専念することができ、オリンピックの本番を迎えられる効果は大きいといえる。

さらに、リハビリテーションを受けられる時間をみると、JISS の場合、選手によっては半日から 1 日受けることができ、また、トレーニング体育館が併設されていることにより、リハビリテーションから現場のトレーニングに移行もしやすくなっている。

図 3 アスレティック・リハビリテーション競技別利用人数（延べ人数）（H20～23）



※ロンドンオリンピック実施競技以外は除く

(出典) JSC 調べ

4. ナショナルトレーニングセンター（NTC）について

(1) 概要

ナショナルトレーニングセンター（NTC）は、我が国の国際競技力向上を図るため、

- ・ナショナルレベルの選手の集中的・継続的な強化活動
- ・競技者育成プログラムに基づくジュニアアスリートの育成
- ・トップアスリートを強化する指導者（ナショナルコーチ）の質の向上を推進する役割を担っている。

(2) 事業の状況

具体的には以下により構成されており、多くの競技をカバーしている。

ア. ナショナルトレーニングセンター（中核拠点）

トップアスリートが同一の活動拠点で集中的・継続的にトレーニング・強化活動を行うための中核拠点施設として、2007（平成 19）年から一部の供用を、2008（平成 20）年から全面供用を開始している。現在 17 競技種目に次のとおり対応している。

- ・屋内トレーニングセンター：ボクシング、ウエイトリフティング、レスリング、柔道、卓球、ハンドボール、バスケットボール、体操、バレーボール及びバドミントンに対応。また JISS 内の NTC 施設では、競泳、シンクロナイズドスイミング、フェンシング、新体操、トランポリンに対応。
- ・陸上トレーニング場：陸上に対応。
- ・屋内テニスコート：テニスに対応。
- ・アスリートヴィレッジ（宿泊施設）

各練習施設には、それぞれの国際ルールで定められた用具・器具が備えられ、448 人を収容できる宿泊施設についても様々な合宿形態や長期滞在などに対応できるほか、栄養管理食堂における良質な栄養の摂取で体調管理ができるなど、トップアスリートによる高レベルなトレーニングに対応できるよう整備されている。また、隣接する JISS のスポーツ医・科学支援事業やスポーツ診療事業等と連携を図りつつ、スポーツ科学・医学・情報を取り入れた効果的なトレーニングを実施している。

写真 5 体操専用練習場



写真提供 JSC

イ. NTC 競技別強化拠点

中核拠点では対応できない冬季競技、海洋・水辺系競技（ボート、セーリング、カヌー）、屋外系競技（サッカー、ホッケー、自転車、馬術、ライフル射撃、ク

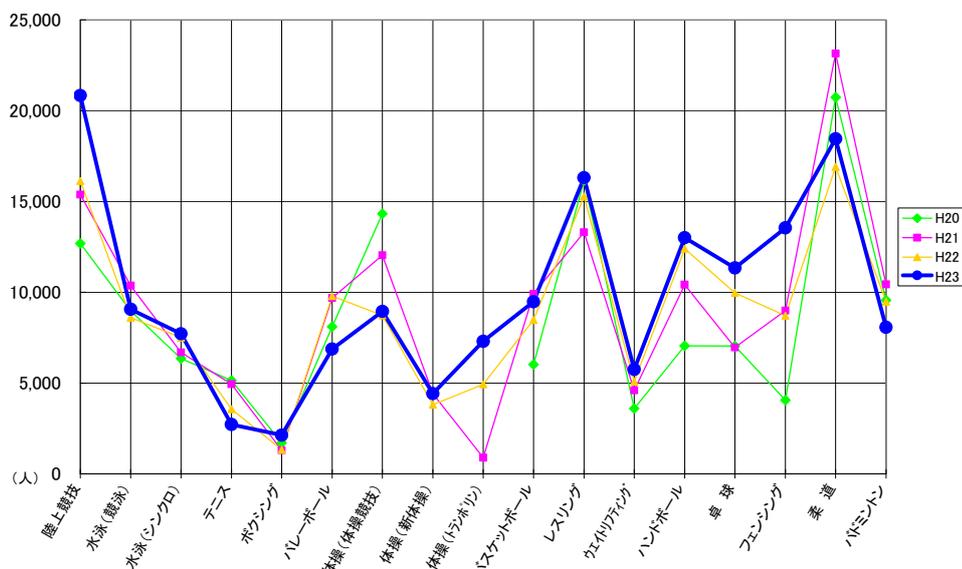
レー射撃、アーチェリー及び投てき)及び高地トレーニングについては、全国にある既存のトレーニング施設を平成19年度から順次、競技別のNTCとして指定している(21競技等23施設)。

そこでは、ナショナルチームの強化やジュニアアスリートの計画的な育成を行うため、優先・専有利用できる施設を確保するとともに、トレーニング場の競技条件の向上、科学的なトレーニングを行うための医・科学サポートや情報ネットワーク化を図っている。

(3) 活用状況、活用競技のメダル獲得と入賞状況

NTCの設置により、長期間、集中的・継続的なトレーニングを行うことができるようになった。このため、多くの競技で、2011(平成23)年の利用者数は、2008(平成20)年のそれを上回る傾向にある。

図4 NTC・JISS(専用トレーニング施設)競技別利用人数(延べ人数)(H20~23)

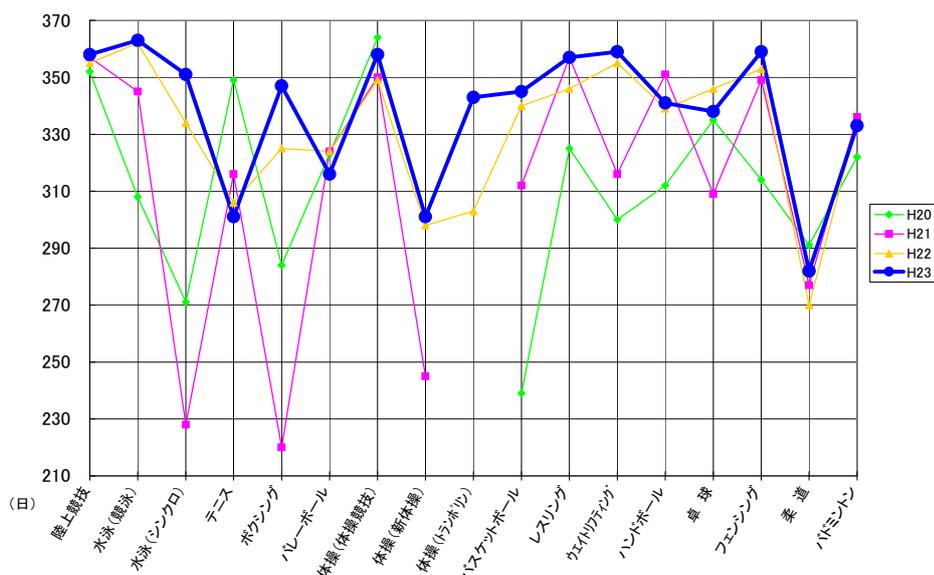


※陸上競技は、他競技の利用を含む。

(出典) JSC 調べ

2008(平成20)年から2011(平成23)年にかけて、ほとんどの競技種目で利用日数が増え、365日に近い競技種目もある。2011(平成23)年の利用率で見れば、海外派遣や予選等が始まる状況にあるにもかかわらず、どの競技もトップアスリート等のNTC利用率は7割以上と極めて高く、水泳や柔道、レスリング、体操、フェンシング、ボクシング、ウエイトリフティングなど、今大会でメダルを獲得した競技のトレーニングに大きく貢献したといえる。

図5 NTC・JISS（専用トレーニング施設）競技別利用日数（H20～23）



※陸上競技は、他競技の利用を含む。

(出典) JSC 調べ

NTC 中核拠点に練習施設がある競技（17 競技種目）のメダル獲得数は、金が 7、銀が 12、銅が 15、計 34、4～8 位の入賞が 35 であった。競技別 NTC がある競技（12 競技種目等）については、銀 2、銅 2、計 4、4～8 位の入賞が 4 であった。また、いずれもない競技（5 競技種目）では、4～8 位の入賞が 3 であった。

NTC 中核拠点がある競技では、メダル獲得者・入賞者の大部分が利用している。

表7 NTC 中核拠点がある競技、競技別 NTC がある競技、いずれもない競技別の結果

(単位：個)

区分（競技種目数）	金	銀	銅	入賞	計
NTC 中核拠点がある競技（17）	7	12	15	35	69
競技別 NTC がある競技（12）	0	2	2	4	8
NTC 中核拠点、競技別 NTC いずれもない競技（5）	0	0	0	3	3
計	7	14	17	42	80

(出典) 文部科学省調べ

平成 24 年 10 月に、JOC が NTC を利用した NF にそれぞれ行ったアンケート結果（質問に対し、「はい」「いいえ」「どちらでもない」から一つ選択）によれば、「常時、優先利用できる練習環境は有効であったか」との問いに対し、「はい」と回答した NF が NTC 中核拠点・競技別 NTC とともに 90%以上であり、特に、JISS などの医・科学機能等との併用や連携については、「有効であったか」との問いに対し、NTC 中核拠点で 100%、競技別 NTC でも 90%が「はい」との回

答であった。

表8 NFへの「NTC中核拠点・競技別NTCの効果」アンケートについて

質問内容	NTC中核拠点	競技別NTC
常時、優先利用できる練習環境は有効であったか。	94.1%	90.0%
大会本番と同じような環境（器具等）で練習できたことは有効であったか。	88.2%	80.0%
医・科学機能（JISS）が併用されていた環境で練習できたことは有効であったか。	100.0%	—
大学、医療機関、JISS等、関係機関との連携による医・科学支援の環境は有効であったか。	—	90.0%
栄養、及びコンディショニングに配慮された宿泊棟やレストランはトレーニングの向上に効果的であったか。	94.1%	—
宿泊やレストラン等、関係機関との連携による栄養及びコンディショニングはトレーニングの向上に効果的であったか。	—	70.0%

注）アンケートで、「はい」を選択した率（出典）公益財団法人日本オリンピック委員会調べ

トップアスリートにもトップレベルの練習が必要であり、今回のロンドンオリンピックに向けて専有施設で集中した長期合宿やJISSのスポーツ医・科学サポート面での充実、アスリートヴィレッジでの休養等ができたことによりメダル獲得につながった。JOCのNFに対する聞き取りによれば、例えば、今回のメダル獲得競技団体の柔道やレスリング、フェンシングでは、NTC中核拠点設置後の状況として、

- ・ナショナルレベルの合宿・練習の時間確保が充実した。
- ・1回の合宿時の参加人数も格段に多くなった。
- ・世界で戦える可能性のある選手や国際的な指導者を1カ所に集めて高レベルの練習を日常化させることができた。

などの声が聞かれ、練習の質・量がともに充実するなど、NTC中核拠点設置後の合宿状況は大きく改善された。

また、その他の効果として、他の競技種目との交流があげられる。従来は、各競技ごとに練習施設や合宿施設を確保して練習を行っていたが、NTC中核拠点設置により、NF間の縦割りをこえて、選手・コーチ・監督同士のコミュニケーションなど、横の交流が進んだことにより、チームジャパンとしての一体感が醸成された。このことが、今回のオリンピックでの活躍・成果に大きく役立ったものと考えられる。

NTC中核拠点に対する各NFの要望としては、本番と同等の施設の整備や練習施設・共用スペースの拡充、併設するJISS診療機能の夜間・休日でのフルサポート化などがある。今後、こうした要望に対応しつつ、競技別NTCの競技種目の充実や、個別の拠点における利用の拡充への対応が求められる。

5. マルチサポート事業について

マルチサポート事業は、オリンピック競技大会等で、我が国が世界の強豪国に競り勝ち、より確実にメダルを獲得するため、トップアスリートなどメダル獲得が期待される者に対して、多方面からの専門的かつ高度な支援を戦略的・包括的に実施するものである。国は、ターゲット競技種目を指定し、「アスリート支援」、「マルチサポート・ハウス」をJSCに、「研究開発」を筑波大学にそれぞれ委託した。

今大会は38個のメダルを獲得したが、そのうち35個がターゲット競技種目で、メダル獲得競技総数13競技のうち11競技がターゲット競技種目だった。特に、水泳（競泳）では戦後最多のメダルを獲得し、レスリングでは全競技を通じて日本人女子選手として初の3連覇を2名の選手が成し遂げるなどの大きな成果があった。

また、アーチェリーやバドミントンなど、将来性のある競技種目にも支援できるようになり、その結果、今回、アーチェリーでは女子として初のメダル（銅）を獲得、バドミントンでは男女通じて初のメダル（銀）を獲得するなどの成果も生まれている。

なお、マルチサポート事業の対象となったターゲット競技種目については、おむねメダル獲得につながっていることから、その選定は有効だったと考えられる。今後とも、これまでの実績に加え、NFの強化戦略や今後の選手の状況、国際的な動向等を踏まえつつ、的確な評価・選定を進めていくことが必要である。

表9 平成24年度ターゲット競技種目（夏季）の競技結果

競技（種目又は種別）	メダル	入賞 4・8	備考
水泳（競泳、シンクロ）	11	10	戦後最多のメダル獲得
柔道	7	3	
レスリング	6	2	全競技を通じて日本人女子選手として初の3連覇（伊調、吉田）
体操（体操、新体操団体女子、トランポリン男子）	3	8	
アーチェリー	2	1	女子で史上初のメダル獲得（女子団体）
卓球	1	4	卓球で史上初のメダル獲得（女子団体）
陸上（男子：ハンマー投げ、やり投げ、4×100mリレー、女子：マラソン）	1	1	
バドミントン	1	1	バドミントンで初のメダル獲得（女子団体）
サッカー（女子）	1	0	女子で史上初のメダル獲得
バレーボール（女子）	1	0	
フェンシング（フルーレ男子団体）	1	0	団体で史上初のメダル獲得
自転車（トラック男子）	0	1	
セーリング（470級）	0	0	
ライフル射撃（ピストル）	0	0	
カヌー（女子）	0	0	
トライアスロン（女子）	0	0	
テニス（ダブルス女子）		不出場	
合計	35	31	

（出典）文部科学省調べ

ボクシングやウエイトリフティングについては、ターゲット競技種目外であったが、NTC 中核拠点をフルに活用したことにより、メダル獲得につながったと考えられる。

表 10 平成 24 年度ターゲット競技種目（夏季）以外の競技の競技結果

競技（種目又は種別）	メダル	入賞 4-8	備考
ボクシング	2	0	史上初の 2 階級以上の同時メダル獲得
ウエイトリフティング	1	1	女子で史上初のメダル獲得
フェンシング（フルール男子以外）	0	3	
カヌー（男子）	0	2	
テコンドー	0	2	
サッカー（男子）	0	1	
テニス（男子）	0	1	
陸上（ターゲット種目以外）	0	1	
ホッケー	0	0	
ボート	0	0	
馬術	0	0	
近代五種	0	0	
ハンドボール	不出場		
バスケットボール	不出場		
合計	3	11	

（出典）文部科学省調べ

(1) アスリート支援の状況と評価

アスリート支援は、強化合宿や競技大会における動作分析、ゲーム分析、情報収集、栄養サポート、コンディショニングサポート、心理サポートなど、スポーツ医・科学、情報を活用してターゲット競技種目のトップアスリートが試合に勝つために必要なサポートを実施するものである。

ア. 支援の内容

平成 22 年度、平成 23 年度の 8 分野の支援活動内容と携わったスタッフの延べ人数は、次のとおりであり、ロンドンオリンピック前年の支援活動は、平成 22 年度に比べて約 2.5 倍となっている。

表 11 トップアスリートへの高度な支援活動の各分野の概要及び携わるスタッフの延べ人数（平成 22、平成 23 年度）

（単位：人日）

分野	概要	平成 22 年度	平成 23 年度
心理	選手の心理面におけるコンディション調整の支援として、メンタルトレーニングに関する指導・助言等。	257	522
栄養	選手の身体作り、コンディション調整の支援として、食事摂取に関する指導・助言等。	461	990
スポーツ科学	運動生理学やバイオメカニクスの知見をもとに、選手の体力及びコンディショニングに対する評価・分析・助言や様々なスポーツ動作の客観的な評価・分析・助言等。	3,461	8,420
医学・トレーナー	傷害予防やコンディションの維持を目的として、競技会・練習後のリカバリー等に関する支援。	542	1,451
トレーニング	国際競技力の向上に貢献できる体力の獲得を目指し、トレーニングに関する指導・助言等。	371	1,103
情報戦略	競技力向上に資するような競技関連情報を収集・加工して、選手・コーチ等に提供。	527	684
マネジメント	競技会時や強化合宿等において、選手団がスムーズに行動でき、競技力を最大限発揮できるよう、マネジメントに関する支援。	539	2,235
映像技術	練習、試合時の競技映像を迅速かつ効率的にフィードバック、アーカイブ、共有するための IT 利用環境を整備し、選手、コーチを支援。（無線 LAN、モバイルインターネット、スマートタブレットなどの活用等）	555	1,195
計		6,713	16,600

（出典）JSC 調べ

イ. 活動例

・競泳

世界選手権などの分析結果から、泳ぎよりもターンに課題を持つ選手が多いことが分かり、国内の試合では水中動作分析用カメラを増やし、水中のフォーム分析を強化した。

- ・レスリング

ウエイトコントロールが不可欠であるため、国内外合宿においては献立調整、栄養アドバイス、体重測定を実施したほか、国際大会時には、減量に伴う食事管理、リフィーディング及び栄養アドバイスを実施した。

- ・柔道

組織委員会・国際競技連盟等関係者からの各種情報収集に基づく現地行動・活動計画立案、ポイントランキング分析による選手派遣戦略立案、マルチサポート・ハウスの活用シミュレーションなどを実施したほか、試合映像の撮影、フィードバックを実施した。

- ・体操

NTC での練習中の映像を常時撮影し、各自の課題に基づいて自主的に練習している選手が、必要なときに映像を閲覧できる仕組みを用意した。

- ・サッカー

合宿及び国際大会等に帯同し、コンディショニングサポートを実施した。また、練習中や大会中の試合映像などを即時フィードバックできるシステムを導入した。

- ・フェンシング

強化のためのトレーニング指導、コンディション調整のための食事指導やケア、障害を持つ選手のリハビリテーションなどを実施した。また、選手の要望に応じて個別心理サポートを実施した。

- ・アーチェリー

国内外の大会及び強化合宿において射型を撮影しフィードバックを行った。また、選手の基礎体力の向上及びコンディショニング維持のため、トレーニングサポートを実施した。

ウ. 活用状況の評価

支援活動に携わるスタッフの延べ人数が示すとおり、各競技における強化合宿や国際競技大会などにマルチサポート事業によるスタッフがフルタイムでナショナルチームに帯同し、必要なサポート活動を展開できたことが、今回の競技結果につながっていると考えられる。

また、オリンピック前の日常のアスリート支援がベースとなってマルチサポート・ハウスを設置することができ、有効な支援体制を整えることができた。

なお、本事業については、2010（平成22）年度からフルタイムスタッフの増員によるサポートでNFの合宿等の帯同ができた効果も大きく、「良かった」という意見が全体として多かった。

写真6 医・科学サポートスタッフ使用の脈波センサー



写真提供 JSC

一方で、サービスの質は、選手個々によって評価が異なるケースがあるので、今後のアスリート支援においては、提供するサポートの質の管理が重要である。

(2) マルチサポート・ハウスの状況と評価

アスリート支援の継続として実施したマルチサポート・ハウスは、選手パフォーマンスの最大化が図られるよう、ロンドンオリンピックでの競技や試合への最善の準備を行う環境を提供するため、選手村村外において、スポーツ医・科学、情報面等から総合的にサポートするための拠点である。

ア. 概要

マルチサポート・ハウスが設置されたのは、オリンピック競技大会では今大会が初めてである。先に行われた中国広州でのアジア大会で試行設置されたが、そのときの経験を活かし、今大会では、立地や機能面に工夫改善を加え、2012（平成24）年7月16日から8月12日まで開設された。

施設の場所は、選手村にできる限り近く、徒歩でアクセスできること、セキュリティにも配慮し安全・安心して利用できること、提供するサポート機能及びサポート・プログラムに相応しいスペースを有すること、などの条件からロンドンのストラトフォード地区の劇場である「ストラトフォードサーカス」を借りて設置された。

マルチサポート・ハウスにおいては、主に、

- ・リカバリープールなどによる疲労回復促進
- ・日本食やメディカルケアによる選手のコンディショニング調整
- ・高気圧カプセルや畳スペースによるリラックス・リフレッシュ
- ・ビデオ分析とフィードバックによる分析サポート
- ・日本の情報拠点やロンドンにいる日本代表選手団との連携・調整を行う情報戦略などが行われた。

イ. 利用実績について

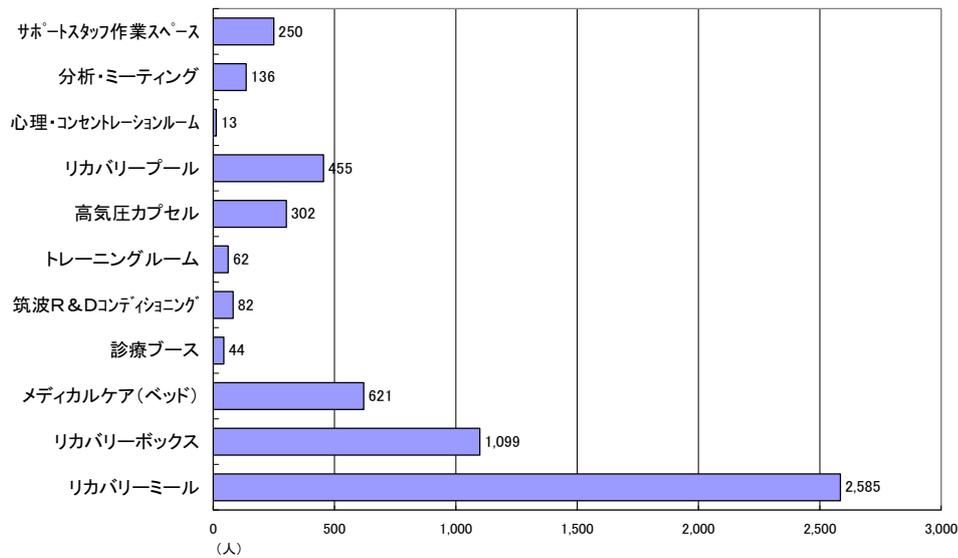
延べ利用者数は4,217名（うち選手1,269名）、1日の平均利用者数は約150名（最高は293名）、利用競技団体数は、選手村に入村した22競技団体のうち馬術・トライアスロンを除く20競技団体（全体の約90%）が利用した。1競技団体当たりの利用日数は平均12.5日、1競技団体の1回の平均利用時間は1時間57分であった。機能別利用でみると、リカバリーミール（日本代表選手団選手が食べ慣れた食材による補食）やリカバリーボックス（持ち出し用補食）が多い。

写真7 リカバリーコンディショニングホール



写真提供 JSC

図6 マルチサポート・ハウスの機能別利用者人数（延べ人数）



(出典) JSC 調べ

ウ. 活用状況の評価

競技直前の選手サポートについては、我が国ではアテネオリンピックの頃からNF別に行われてきたが、予選を通過していない段階から各NFがリスクを負って施設の確保に動かざるを得ないなどの課題があった。しかし、今回のマルチサポート・ハウスの設置により、日本代表選手団が共同で使用できる施設を計画的に効率良く設置することができるようになり、これにより、選手への支援が安定・充実し、NFの負担も軽減された。

また、十分に栄養管理されたリカバリーミールや日本食の提供により、外食によるドーピング違反の恐れも回避することができ、効果的な体重管理を組織的に行うことができるようになった。

2012（平成24）年8月にJSCがNFに対して行った調査によれば、マルチサポート・ハウスの機能について、主な感想は次のとおりであった。

- ・コンディショニングミールやリカバリーミールによる栄養管理で、減量等の体重調整に非常に有用であった。
- ・リカバリーミールからリカバリープール、リカバリーボックスなどのリカバリーコンディショニング機能による体力管理に有効であった。
- ・直前トレーニングパッケージ活用によるコンディショニングとリカバリー・リラックスで体重調整に非常に有用であった。

また、同様の調査において、マルチサポート・ハウスを活用した選手の主な意見は次のとおりであった。

- ・選手村から近くてよかった。日本と同じ環境だった。
- ・日本のJISSのようで大変使いやすい。
- ・館内練習と食事ができる場所があり便利だった。

- ・食事や炭酸泉、高気圧カプセルなどを活用しコンディションを万全に備えることができた。
 - ・食事のおかげでスムーズに体重を落とすことができた。とても美味しく、パワーが出た。
 - ・リカバリーボックスは非常に活用できた。
 - ・ケアブースに全ての機能があり、助かった。
 - ・ほぼ毎日利用させてもらった。
日本の競技力向上につながると思った。
 - ・日本食をはじめ、NTCで過ごしているように感じた。
また、一方では、
 - ・減量の時には歩くのが少しきつかった。
 - ・少し歩くのが大変だったので、試合が始まってからはあまり利用できなかった。
- という意見もみられた。

写真8 リカバリーミールホール



写真提供 JSC

全体として、立地に関して満足、一部満足は75.0%であり、目的は達成されたとの評価であった。機能に関しては満足、一部満足で98.6%、使用等に関しては満足、一部満足で94.0%と極めて高い評価であり、目的は十分に達成されたといえる。

表12 マルチサポート・ハウス 選手へのアンケート集計

	使用等に関する事		立地に関する事		機能に関する事		計	
満足	45	90.0%	16	50.0%	67	94.4%	128	83.7%
一部満足	2	4.0%	8	25.0%	3	4.2%	13	8.5%
不満足	3	6.0%	8	25.0%	1	1.4%	12	7.8%
計	50	100.0%	32	100.0%	71	100.0%	153	
要望	13		6		10		29	

} 延べ
141人、
92.2%

(出典) JSC 調べ

オリンピックの大会期間中は、選手村には、選手の家族は入れず、競技会場も規制が厳しい。選手が家族と会える場があることも重要である。精神的な満足を得るためにも、マルチサポート・ハウスにこうしたスペースが設けられており、この点についても評価が高かったといえる。

マルチサポート・ハウスにおいては、日本人選手は日本と同じ環境でリラックスしながら、次の試合へ向けて準備している様子も見られ、試合前の最後の準備を十分に行うことができる環境を提供したといえる。今後は、前述の機能に加え、確実にメダルを獲得するためのアドバンテージを得る機能についても検討していく必要がある。

(3) 競技用具等研究開発の状況と評価

ア. 事業の概要

メダル獲得を図っていくためには、競技用具、トレーニング機器、トレーニング方法、コンディショニングについて、科学的な検証に基づき研究開発を行うことは重要である。このため、平成 22 年度から、競技、トレーニング、コンディショニングの 3 つのプロジェクトについて、ターゲット競技種目の選手やコーチ、各 NF からの要望を踏まえた研究開発を実施した。現場サイドとのディスカッションや測定・観察を経て、科学的な検証に基づく研究開発を行い、それを現場で試し、修正し、さらに改良していく。こうした作業を繰り返し、成果につながる用具等の開発に努めた。

個々のプロジェクトの実施では、筑波大学が橋渡しとなって、国内の大学、企業、研究機関・スポーツ団体等と連携体制を作ったため、個々の分野では、これまで実現できなかった高度な水準の研究開発や、今までスポーツとは縁のなかった新たな企業と協力して研究開発を実施することなどが可能となった。

イ. 研究開発の状況

具体的には、次の 3 分野に関して研究開発が行われた。

[競技に関する研究開発]

形態や体力、技術など選手の特性を最大限に引き出せる用具、器具、ウェアなどの研究開発が行われた。日本のトップアスリート及び個々の選手の特性に合うように既存の用具・器具・ウェアを改良するとともに、最適なテーラーメイド型の用具・器具・ウェアの開発を実施した。

[トレーニングに関する研究開発]

移動スピードの強化、日本人選手の弱点とされる体幹・股関節筋群の強化、柔道に要求される特殊な筋力の強化を狙いとするトレーニング機器と方法の研究開発、レースパターンやゲームパターンの構築及びトレーニングの基本となる位置情報収集のための移動体追跡解析技術の開発などを実施した。

[コンディショニングに関する研究開発]

個人又はチームのパフォーマンス発揮に最適なコンディションの維持、リハビリ促進に関する研究開発、コンディションや疲労の状況を遠隔地からチェックし、診断、アドバイスできるシステムの研究開発などを行った。

例えば、疲労、睡眠、補食摂取など個人及びチームのパフォーマンス発揮に最適なアクティブコンディショニングの諸課題に関する医学的研究、低酸素吸入マスクの研究開発、高圧治療法を利用したリカバリー促進法の研究を行った。

ウ. 活用状況と評価

競技、トレーニング、コンディショニングのそれぞれに関する主な成果は下表のとおりである。

表 13 研究開発プロジェクト「競技に関する研究開発」の成果の概要

成果の概要	使用状況
テラーメイド型体操（鉄棒）用プロテクターの製作	◎
選手に合った陸上やり投げ用シューズのスパイクデザイン	◎
レスリング用シューズの軽量化、競技中の動きに合わせたシングルレット（ウェア）の製作	◎
選手のプレスタイルに合わせたフェンシング用シューズの製作	◎
選手の要望を取り入れた形状のフェンシング用ヒルト（グリップ）の製作	◎
剣先圧力の最適調整を可能とするフェンシング用剣先抵抗測定器（センサー）の開発	◎
高反発と高回転を両立させる卓球用ラケットの検討	データ利用◎
バドミントン用フットワーク評価・トレーニング装置の開発	開発中
ランニング時の姿勢保持を可能にするトライアスロン用ウェアの製作	◎
自転車用低抗力ハイテクウェアの製作	◎
自転車用フレームの低重心化等	○
自転車用ホイールの軽量化	◎
数値流体力学によるセーリング艇の性能評価	○
精度の高いレース情報収集システム（セーリング）の提供	◎
選手の艇操作特性にあったセーリング用マスト・セールの開発	○
レスリング試合情報収集・分析・提供システムの構築	◎
3ローター射出式のボール投射マシン（サッカー）の開発	△

注) 使用状況の表示は次のとおりとする。

◎＝選手等に提供し、オリンピック（現地）で使用された。

○＝選手等に提供したが、オリンピック（現地）での使用はなかった。

△＝選手等に提供したが、使用試験段階で改善や仕様の変更希望があった。

（出典）筑波大学調べ

表 14 研究開発プロジェクト「トレーニングに関する研究開発」の成果の概要

成果の概要	使用状況
小型移動スピード用トーイングマシン（陸上等）の開発	◎
特殊筋力（体幹部、腕・手部）強化トレーニング機器（柔道、スピードスケート等）の開発	◎
複数視点映像統合技術（バレーボール、サッカー、テニス等）の開発	◎
GPS 計測器（サッカー、スピードスケート）の開発	開発中
特殊トレッドミル（陸上）の開発	◎

注) 使用状況の表示は次のとおりとする。

◎＝選手等に提供し、オリンピックのためのトレーニング等に活用された。

(出典) 筑波大学調べ

表 15 研究開発プロジェクト「コンディショニングに関する研究開発」の成果の概要

成果の概要	使用状況
迅速な疲労評価を可能とするキットの開発（陸上、水泳、卓球等）	◎
特殊環境時の呼吸症状悪化予測（陸上、水泳、卓球等）	◎
携帯型高反発マットレスの開発（陸上、水泳、卓球等）	◎
抗筋疲労効果があるサプリメントの開発（陸上、水泳、卓球等）	◎
低酸素・高酸素マスクの小型化（陸上、競泳、トランポリン、トライアスロン、セーリング等）	◎
高気圧酸素療法（競泳、サッカー女子、バレーボール女子、重量挙げ男子、近代五種女子）	◎
遠隔診断システム（コンディショニング・データベース）の開発（陸上等全競技）	◎

注) 使用状況の表示は次のとおりとする。

◎＝オリンピック期間中、あるいはトレーニングにおいて選手のコンディショニングサポートのために現地で活用された。

(出典) 筑波大学調べ

研究開発事業の目的が、競技用具、トレーニング、コンディショニングに関する研究開発に主体をおいていることから、競技種目ごとの競技成績からの分析は、なじまない。このため、ロンドンオリンピックまでの研究成果及び取組に関する分析・検証については、NF 及び選手等への開発機器の提供及び利用状況についての情報収集により、研究目標達成度、利用度（頻度）、選手・コーチの使用感、将来性などの評価について、今後、開発担当者において、つぶさに検証されていく予定である。

なお、使用感などの選手、コーチの感想は次のようなものであった。

表 16 マルチサポート事業研究開発プロジェクトに対する選手・コーチ等のコメント

プロジェクト	サブプロジェクト	選手・コーチ等のコメント
競技に関する研究開発	体操（鉄棒用）プロテクター	○自分の使いやすい形状なのでよかった。
		○柔らかいけど切れにくそうだと感じた。
		●質感、強度の改善が必要。
		△強度が強くなった分、伸びにくくなり、なれるまでに時間がかかるようになった。長持ちはすると思う。
	フェンシング用シューズ	○フィット感、グリップ、シューズ内で足がずれなかったので満足している。
		△耐久性については改善して欲しいが、フィット感については満足している。
フェンシング用ヒルト（グリップ）	○使用感、安心感が段違い。耐久性も含めて最高だった。	
	△形状は最高で使用感もとてもよかった。こすれて色落ちするのが残念。	
トレーニングに関する研究開発	体幹・股関節強化トレーニング機器（マルチパワーC）	○重さを利用した前後運動を通じて、体幹部を鍛えることが期待できる。
	特殊筋力強化トレーニング機器（柔道）	○単純なウエイトトレーニングとは異なり、柔道に必要な専門的な筋力トレーニングとしては最適であった。
		●導入時期がもう少し早かったら、より効果的であったと思う。
コンディショニングに関する研究開発	唾液を用いた免疫機能評価による疲労度/ストレス度測定キットの開発	<p><卓球></p> <p>定期的なモニタリングにより認められた免疫機能の減少が積極的なリカバリー（マッサージ、鍼治療など）及び感染予防で回復傾向となった。</p>

注) 選手・コーチ等のコメントの表示は次のとおりとする。

○＝比較的良いコメント

△＝試合で用いたが要改善

●＝試合で用いなかった など

(出典) 筑波大学調べ

今回、開発した体幹・股関節強化トレーニング機器（マルチパワーC）については、「非常に良い」というのが大部分の意見で、また、特殊筋力強化トレーニング機器については、柔道で、「普通ではできないトレーニングができる。」「怪我をしていても実践的なトレーニングができる。」などの声がある一方で導入時期が遅れたとの意見があった。

なお、研究成果については、ロンドンオリンピックのみの利用に限らず、例えば体操競技のプロテクターは、安価に小・中学生への供給が可能であり、セーリングのマストは安くて良い性能のものができることにより、学生にも使ってもらえるようになった。

研究開発の全体として、開始からロンドンオリンピックまでの期間が、比較的短く、開発期間・試用期間も短かったにもかかわらず、選手たちによく使用されたと考えられる。

また、開発、試行、改良など現場の意見をよく聞いたことで、製品にまで至った確率が高く、選手の使用につながったと考えられる。今後もターゲット競技種目に成果が出ることを前提として、研究開発を継続していくことが望まれる。

一方で、研究開発による製品を、使用するかしらないかは、スポンサー等の有無にかかわらず、最終的に選手が判断し選ぶアスリートファーストの原則で行っている。NFは、マルチサポート事業による支援をより効果的なものとするため、強化担当責任者と現場指導者、選手がより緊密にコミュニケーションを図り、研究開発事業の実施者と一層の連携を図っていく必要がある。

写真9 研究開発（体幹・股関節トレーニング機器（マルチパワーC））



写真提供 筑波大学

6. おわりに

今回の検証チームによる本報告書では、①JISS のスポーツ医・科学支援や、②NTC 整備により可能となった高度なトレーニング、③アスリート支援、マルチサポート・ハウス、研究開発からなるマルチサポート事業が、今回のロンドンオリンピック競技大会における競技成果とどのように関連性があったか、その効果等の検証を行った。

この検証の結果、これらの取組がそれぞれの役割と連動した機能を発揮してきたことにより、前述の競技結果となったことが、選手やコーチ・監督への調査結果などから明らかになった。

また、今大会のメダルの獲得数、入賞数は、JISS、NTC やマルチサポート事業を活用した選手育成・強化・支援の成果のあらわれであるが、2011（平成 23）年に文部科学省に副大臣主催で設置された「2012 ロンドンオリンピック強化支援の検討に関する懇談会（2012 ロンドンオリンピック強化タスクフォース）」が機能して成果につながったことや、この他にも JOC と JISS が主導して 2006（平成 18）年から NF と協議しつつ作成しているデータブック「TEAM JAPAN Data Book 国際競争力 2011」などの活用や一貫指導システムの構築が土台となって、各 NF が行った強化戦略なども、競技力向上やメダル獲得の重要な要素となっていると考えられる。

さらに、選手の強化・支援を展開していく際に重要なことは、トップアスリートといえども、先天的な能力のみではなく、日頃の練習をいかに良質なものとするか、最高レベルのトレーニングをいかに集中して効果的に長期間行うかということである。その際、オリンピック競技大会のようなトップレベルの競技大会では、僅差で勝敗が大きく分かれてくることから、少しでもアドバンテージを得ることが必要であることも分かった。

今回、本検証チームにおいて検証した事業の取組は、良質な練習や最高レベルのトレーニングを行うことなどについても効果的に機能した。スポーツ医・科学研究や支援、高度なトレーニングとマルチサポート事業のような国際競技力の向上とメダル獲得に向けた効率的な事業については、その機能・品質の向上・高度化を図りつつ、今後もしっかりと継続していく必要がある。このためにも安定した財源の確保は必須条件であり、スポーツ界のみならず、社会全体の理解を得ながら進めていくことが必要である。

競技スポーツの世界は早いスピードで動いており、今後、本報告書も踏まえ、2014（平成 26）年のオリンピック冬季競技大会（2014／ソチ）や

写真 10 選手団のオリンピック選手村入村



写真提供 JOC

2016（平成 28）年のオリンピック競技大会（2016／リオデジャネイロ）、東京が立候補している 2020（平成 32）年オリンピック競技大会へ向けて、今回、検証を行ったそれぞれの事業について、JISS のサポート体制の充実や NTC 中核拠点の一層の国際化に向けた施設・設備の充実と競技別 NTC の競技種目の充実、それらと連動したマルチサポート事業の充実等、さらなる充実に向けた方策を検討し、国際競技力のより一層の向上に取り組んでいくことが期待される。

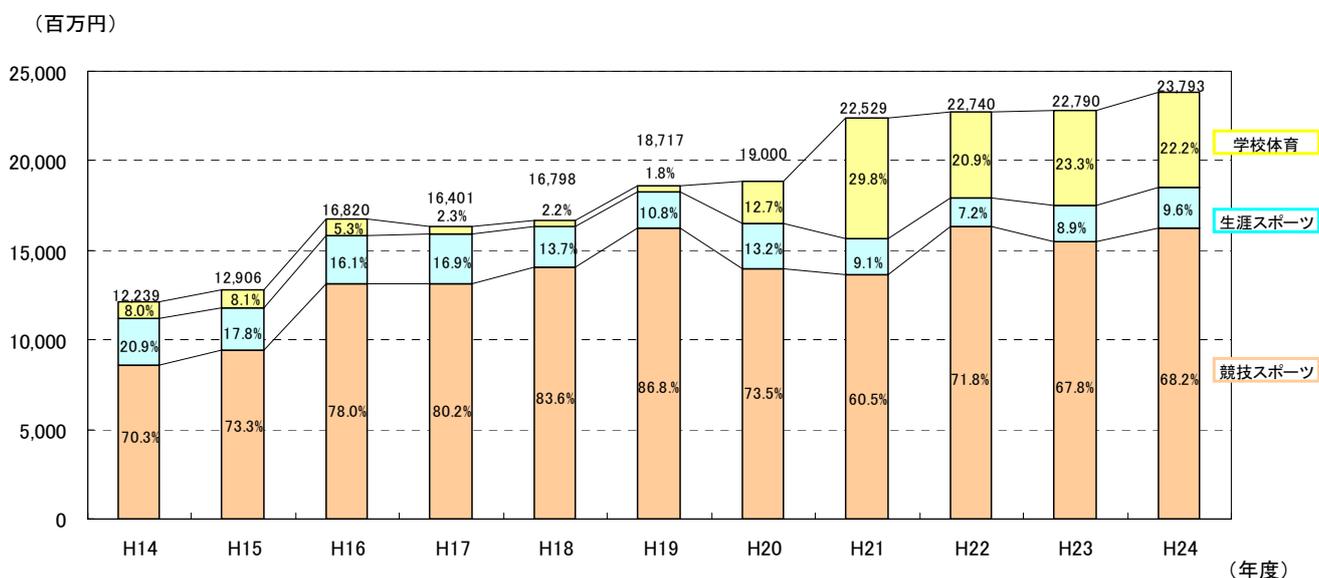
なお、会議においては、平成 24 年度から開始される、メダル獲得を目指すことができる選手層を戦略的に厚くするための「メダルポテンシャルアスリート育成システム事業」を効果的に実施していくことや、選手のキャリア支援システムの構築、ドーピング防止活動の推進、女子選手への支援、国際審判員のステータス確立への支援など、今後の中・長期的な課題も提起された。これらについても、今後、議論を重ねて取り組んでいくことが求められる。

<参考資料 目次>

・ 文部科学省におけるスポーツ関係予算の推移	29
・ スポーツ関係政府予算（諸外国との比較）	29
・ 競技力向上関係予算	30
・ JISS の事業概要と活用状況	31
・ JISS によるアスリートチェックの競技別内訳	32
・ JISS スポーツ診療事業 診療件数内訳	33
・ アスレティック・リハビリテーション競技別利用件数（延べ人数）	33
・ 我が国のナショナルトレーニングセンター（NTC）	34
・ ナショナルトレーニングセンター競技別強化拠点一覧	35
・ NTC・JISS（専用トレーニング施設）競技別利用人数及び利用日数	36
・ NTC 陸上トレーニング場競技別利用件数	37
・ NTC 対応競技とロンドンオリンピックの競技結果	38
・ マルチサポートによるメダル獲得プロジェクト	39
・ マルチサポート事業平成 24 年度ターゲット競技種目	40
・ ロンドンオリンピック実施競技と JISS、NTC、マルチサポート事業の 対応状況及び競技結果	41
・ 開催実績	42
・ ロンドンオリンピックにおける選手育成・強化・支援等に関する検証 チームの設置について	43

文部科学省におけるスポーツ関係予算の推移

- 平成24年度は約238億円であり、近年では増加傾向である。
- 競技スポーツ関連予算が大きな比重を占めている。



(注) その他のスポーツ予算については1%未満のため、表示しない

(出典) 文部科学省調べ

スポーツ関係政府予算(諸外国との比較)

- スポーツ関係政府予算の対GDP比を、諸外国と比較して日本は低い水準にある。

	スポーツ関係政府予算額 (円換算)	スポーツ関係政府予算額 (自国通貨)	GDP額 (自国通貨)	スポーツ関係予算のGDPに占める割合	スポーツ関係予算の対GDP比について、日本を1.0とした時の水準
日本 (H24)	185億1,000万円	185億1,000万円	479兆1,725億円	0.004%	1.00
イギリス (H22)	749億6,500万円	5億7,666万ポンド	1兆4,536億ポンド	0.040%	10.27
ドイツ (H21)	263億3,800万円	2億2,903万ユーロ	2兆3,971億ユーロ	0.010%	2.47
フランス (H23)	996億4,800万円	8億6,650万ユーロ	2兆0,095億ユーロ	0.043%	11.17
イタリア (H22)	93億1,700万円	8,101万3,560ユーロ	1兆5,488億ユーロ	0.005%	1.35
スウェーデン (H23)	255億7,500万円	17億500万SEK	3兆4,843億SEK	0.050%	13.01
デンマーク (H21)	134億4,700万円	7億9,100万DKK	1兆6,561億DKK	0.048%	12.37
アメリカ (H23)	—	—	15兆2,270億ドル	—	—
カナダ (H22)	172億2,000万円	2億500万カナダドル	1兆7,115億カナダドル	0.015%	3.78
オーストラリア (H21)	50億8,400万円	6,200万豪ドル	1兆2,483億豪ドル	0.005%	1.29
ニュージーランド (H21)	39億円	6,191万NZドル	1,859億NZドル	0.033%	8.63
韓国 (H21)	149億4,500万円	2,135億ウォン	1,063兆0,591億ウォン	0.020%	5.20
中国 (H22)	304億8,400万円	25億4,038万元	1兆6,215億元	0.006%	1.65

(出典) 文部科学省委託調査「スポーツ政策調査研究」(笹川スポーツ財団、平成23年7月)に基づき文部科学省作成

・各国GDP額の出典:「World Economic Outlook Database, April 2011」(IMF、2011)

・学校体育関連予算除く

競技力向上関係予算

(平成23年度予算額	15,457百万円)
平成24年度予算額	16,215百万円)

「日本再生特別枠」

1. ナショナル競技力向上プロジェクト 3,214百万円 (新 規)

トップレベル競技者が世界の強豪国に競り勝ち、確実にメダルを獲得することができるよう、競技者への支援や強化・育成システムを充実することで、我が国の国際競技力の向上を図る。

- (1) マルチサポートによるメダル獲得プロジェクト 2,746百万円 (新 規)
メダル獲得が期待される17競技をターゲットとして、アスリート支援や研究開発など、多方面からの専門的かつ高度な支援を戦略的・包括的に実施するとともに、女性アスリートの戦略的サポートを実施する。
- (2) メダルポテンシャルアスリート育成システム構築事業 468百万円 (新 規)
有能なアスリートをメダルポテンシャルアスリート(メダル獲得の潜在力を有するアスリート)まで確実に引き上げるシステム(パフォーマンスパスウェイ)を構築するとともに、各強化段階にあるアスリートを次段階へと引き上げるための特別強化・育成事業を実施する。

2. 日本オリンピック委員会補助 2,588百万円 (2,588百万円)

オリンピック競技大会等に向けた選手強化事業を実施するとともに、ロンドンオリンピック競技大会等に日本代表選手団を派遣する。

3. 次世代アスリート特別強化推進事業 394百万円 (394百万円)

2012年のロンドンオリンピック及び2016年のリオデジャネイロオリンピック競技大会のメダル獲得に向けてナショナルコーチ及びアシスタントナショナルコーチを配置し、特別強化プランを実施する。

4. NTC競技別強化拠点施設活用事業 559百万円 (559百万円)

冬季、海洋・水辺系、屋外系のオリンピック競技及び高地トレーニングについて、既存のトレーニング施設を競技別のNTCに指定の上、施設を活用した事業を実施し、国際競技力の向上を図る。

5. その他 9,460百万円 (11,916百万円)

日本スポーツ振興センター施設整備費補助金、国民体育大会開催事業、スポーツ仲裁活動推進事業、ドーピング防止活動の推進 等

(出典) 文部科学省

J I S S の事業概要と活用状況

1 スポーツ医・科学支援事業（アスリートチェック）

競技者のパフォーマンスに直接的・間接的に影響を及ぼすと考えられる基礎的、共通的及び種目対応的な項目についてスポーツ医・科学的な検査・測定を行い、競技力の向上に資するための科学的情報を提供する。

年度	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
利用者数	724	1,612	1,330	1,229	1,600	1,704	1,277	1,215	1,689	2,004	1,410

2 スポーツ医・科学支援事業（医・科学サポート）

NFの要望を受けて、我が国のトップレベルの競技者及びチームの国際競技力向上に向けた活動に対し、プロジェクトチームを編成するなどして、スポーツ科学・医学・情報の各側面から組織的・総合的・継続的な支援を行う。

年度	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
競技種目数	4	10	21	21	27	25	33	34	37	37	38

3 スポーツ医・科学研究事業

スポーツ科学・医学・情報の各機能が統合したJ I S Sの特長を生かし、必要に応じてNFスタッフや国内外の研究者・研究機関と連携しながら、国際競技力向上のための有用となる知見や方策を生み出すための調査・研究を行う。

年度	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
研究課題数	10	11	11	10	22	17	30	26	12	12	12

4 スポーツ診療事業

トップレベル競技者のスポーツ外傷、障害及び疾病に対し、競技スポーツに通じたスポーツドクターやアスレティック・トレーナー等の専門スタッフが診療、リハビリテーションを行うことにより、競技者のコンディションを良好な状態に維持・回復させ、オリンピック競技大会をはじめとする各種国際競技大会において最高の競技力を発揮できるよう支援する。また、JOCの医学サポート部会と連携して、競技現場を含めたネットワーク作りを積極的に行うことにより、国際競技力の向上に貢献する。

年度	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
診療件数	1,344	7,818	9,878	10,509	10,552	9,743	11,376	13,066	11,894	12,790	15,210

5 スポーツ情報事業

国内外のスポーツ関係機関とのネットワークを活用して、各種のスポーツ情報の収集・分析・蓄積・提供を行い、我が国の国際競技力向上を支援するとともに、スポーツ情報に関する我が国の中枢機能を確立・強化する。

年度	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23
情報発信件数	-	-	132	397	400	1,448	2,160	2,223	1,530	2,758	2,961

（出典）JSC調べ

JISSによるアスリートチェックの競技別内訳

(単位:人)

競技名	H20		H21		H22		H23	
	NF要望	派遣前	NF要望	派遣前	NF要望	派遣前	NF要望	派遣前
ロンドンオリンピック実施競技	317	333	468	621	433	761	486	525
陸上競技	132	22	133	105	129	78	149	129
水泳	0	33	9	108	0	92	0	75
サッカー	0	37	0	88	0	57	0	51
テニス	0	7	0	16	0	16	0	13
ボート	0	6	16	13	16	12	14	0
ホッケー	0	19	0	34	0	33	25	0
ボクシング	5	0	11	0	0	5	0	0
バレーボール	14	82	68	28	71	74	47	55
体操	5	24	23	20	8	28	7	34
バスケットボール	41	12	60	48	40	48	77	31
レスリング	0	10	0	0	0	24	0	0
セーリング	32	9	27	4	35	16	27	18
ウエイトリフティング	19	8	22	10	23	7	23	11
ハンドボール	0	0	0	0	0	47	0	0
自転車	0	12	14	14	0	30	19	29
卓球	0	4	0	20	0	18	0	17
馬術	0	6	0	0	0	13	0	1
フェンシング	0	7	14	18	45	19	5	18
柔道	0	14	0	32	0	22	0	16
バドミントン	26	1	0	28	30	34	30	0
射撃	0	5	0	17	0	14	0	9
近代五種	0	1	4	0	0	9	8	0
カヌー	0	9	0	0	8	41	18	8
アーチェリー	21	0	31	7	18	10	27	6
テコンドー	0	0	0	11	0	4	0	4
トライアスロン	22	5	36	0	10	10	10	0
ロンドンオリンピック実施競技以外	371	194	334	266	251	559	321	78
計	688	527	802	887	684	1,320	807	603
	1,215		1,689		2,004		1,410	

NF要望・・・中央競技団体からの要望により、メディカル、フィットネス、心理、栄養の面からトータルに測定・検査を行うもの
派遣前・・・JOCからの要望により、オリンピック競技大会、アジア競技大会等への派遣前に実施するもの

(出典) JSC調べ

JISSスポーツ診療事業 診療件数内訳

■ 診療部門別受診件数(延べ件数※)

診療部門	H20	H21	H22	H23
内科	1,908	1,749	2,569	2,944
整形外科	3,121	2,787	2,742	3,061
リハビリテーション	6,618	5,814	6,099	7,647
歯科	659	717	660	810
眼科	124	139	100	36
耳鼻科	61	54	51	89
婦人科	93	135	131	152
皮膚科	259	217	207	253
心理カウンセリング	116	137	143	64
栄養	107	145	88	154
合 計	13,066	11,894	12,790	15,210

※延べ件数の例:1人の選手が同日に2つの診療科目を受診した場合は「2件」となる。

■ アスレティック・リハビリテーション競技別利用件数(延べ人数)

競技名	H20	H21	H22	H23
ロンドンオリンピック実施競技	4,774	4,364	5,053	6,386
陸上競技	928	909	1,041	1,208
水泳	550	439	697	698
サッカー	842	600	646	796
テニス	289	132	255	82
ボート	17	49	49	17
ホッケー	0	0	19	0
ボクシング	0	0	4	0
バレーボール	97	283	383	252
体操	150	128	224	245
バスケットボール	148	37	43	42
レスリング	326	413	287	449
セーリング	0	0	3	8
ウエイトリフティング	209	88	374	274
ハンドボール	146	208	125	68
自転車	0	22	53	70
卓球	64	40	76	60
馬術	0	0	0	0
フェンシング	127	251	239	930
柔道	536	444	451	837
バドミントン	119	117	42	253
射撃	108	82	15	3
近代五種	23	39	8	12
アーチェリー	0	0	0	68
テコンドー	36	60	1	2
トライアスロン	59	23	18	12
ロンドンオリンピック実施競技以外	1,844	1,450	1,046	1,261
合 計	6,618	5,814	6,099	7,647

(出典) JSC調べ

我が国のナショナルトレーニングセンター(NTC)

NTC(東京都北区西が丘)

トップレベル競技者が同一の活動拠点で、集中的・継続的にトレーニング・強化活動を行うための施設。

<味の素ナショナルトレーニングセンター>



屋内トレーニングセンター



陸上トレーニング場



屋内テニスコート



アスリートヴィレッジ

●陸上

●テニス

- ボクシング
- 体操競技
- レスリング
- ハンドボール
- 柔道

- バレーボール
- バスケットボール
- ウェイトリフティング
- 卓球
- バドミントン

<国立スポーツ科学センター(JISS)>



●競泳

●新体操

- シンクロナイズドスイミング
- トランポリン
- フェンシング

ネットワーク

冬季競技

- スキー
- スピードスケート
- ショートトラック
- フィギュアスケート
- ホッパスレー・リュージュ
- アイスホッケー
- バイアスロン
- カーリング

海洋・水辺系競技

- ボート
- セーリング
- カヌー

屋外系競技

- サッカー
- ホッケー
- 自転車
- 馬術
- ライフル射撃
- クレー射撃
- アーチェリー
- 投てき
- 近代五種

高地トレーニング

NTC競技別強化拠点

冬季、海洋・水辺系、屋外系のオリンピック競技及び高地トレーニングについては、既存のトレーニング施設を活用し、競技別のNTCに指定。

NTC競技別強化拠点に指定された施設では、ナショナルチームの強化やジュニア競技者の計画的な育成を行うための施設の優先・専有利用やトレーニング場の競技条件の向上、科学的なトレーニングを行うための医・科学サポートや情報ネットワーク化を図り、施設を活用した事業を実施。

連携協力

国立スポーツ科学センター(JISS)

NTCでトレーニング・強化活動を行っている競技者に対して、スポーツ医・科学・情報の側面から総合的支援を実施。

スポーツ医・科学支援事業

スポーツ医・科学研究事業

スポーツ診療事業

スポーツ情報事業

ナショナルトレーニングセンター—競技別強化拠点一覽

2012.1.25現在

21競技等23施設

スキー (ジャンプ)
(大倉山・宮の森
ジャンプ競技場)
バイアスロン
(西岡バイアスロン
競技場)



スピードスケート
(明治北海道十勝
オーバル)



アイスホッケー
(苫小牧白鳥アリーナ)



スピードスケート
(長野市オリンピック
記念アリーナ
「エムウエーブ」)



ボブスレー・リュージュ
(長野市ボブスレー・
リュージュパーク
「スパイラル」)



高地トレーニング
(蔵王坊平アスリート
ヴィレッジ)



高地トレーニング
(飛騨御嶽高原高地
トレーニング
エリア)



カヌー
(木場潟
カヌー
競技場)



サッカー
(ジャパンフットボール
ヴィレッジ)



ホッケー
(岐阜県グリーン
スタジアム)



カーリング
(スカップ
軽井沢)



フィギュアスケート
(中京大アイス
アリーナ「オーロラ
リンク」)



陸上・投擲
(熊谷スポーツ文化公園
陸上競技場付帯投擲場)



ボート
(戸田公園
漕艇場及び
国立戸田艇庫)



セーリング
(和歌山マリーナ
・ディンギー
マリーナ)



ライフル射撃
(埼玉県長瀨総合
射撃場)



クレー射撃
(熊本県総合射撃場)



アーチェリー
(ヤマハリゾート「つま恋」)



ショートトラック
(帝産アイススケート
トレーニングセンター)



近代五種
(自衛隊体育
学校)



馬術
(御殿場市馬術・
スポーツセンター)



自転車
(日本サイクル
スポーツセンター)



味の素NTC・JISS(専用トレーニング施設)施設別利用人数及び利用日数

競技名		H20	H21	H22	H23
陸上競技 ※ 他競技の利用を含む		12,690 352	15,383 357	16,127 355	20,840 358
水泳	競泳	8,975 308	10,366 345	8,598 362	9,065 363
	シンクロ	6,350 271	6,687 228	7,500 334	7,715 351
テニス		5,139 349	4,947 316	3,560 306	2,720 301
ボクシング		1,713 284	1,303 220	1,333 325	2,137 347
バレーボール		8,106 323	9,686 324	9,792 324	6,875 316
体操	体操競技	14,324 364	12,039 350	8,725 349	8,945 358
	新体操		4,413 245	3,809 298	4,425 301
	トランポリン		897 86	4,937 303	7,300 343
バスケットボール		6,025 239	9,909 312	8,475 340	9,477 345
レスリング		16,143 325	13,303 357	15,274 346	16,308 357
ウェイトリフティング		3,594 300	4,595 316	5,078 355	5,752 359
ハンドボール		7,053 312	10,418 351	12,406 339	13,003 341
卓球		7,045 335	6,964 309	9,968 346	11,340 338
フェンシング		4,058 314	8,989 349	8,705 353	13,541 359
柔道		20,740 291	23,146 277	16,906 270	18,449 282
バドミントン		9,559 322	10,435 336	9,489 334	8,070 333

※上段:利用人数 下段:利用日数

※シンクロは、平成21年2月から6月まで改修工事のため使用不可

※新体操、トランポリンは、平成21年7月から供用開始

(出典) JSC調べ

味の素NTC 陸上トレーニング場競技別利用件数

競技名		H20	H21	H22	H23	合計	%
専用 トレーニング施設を持つ競技 NTC・JISSに	陸上競技	5,411	4,875	5,727	6,848	22,861	35.1%
	水泳	0	0	0	3	3	0.0%
	テニス	99	120	292	119	630	1.0%
	ボクシング	0	108	23	393	524	0.8%
	バレーボール	313	61	138	0	512	0.8%
	体操	0	0	24	40	64	0.1%
	バスケットボール	0	0	189	17	206	0.3%
	レスリング	3,462	3,635	3,096	4,058	14,251	21.9%
	ウェイトリフティング	146	35	0	0	181	0.3%
	ハンドボール	100	2,021	2,239	1,350	5,710	8.8%
	卓球	172	238	194	34	638	1.0%
	フェンシング	337	68	429	18	852	1.3%
	柔道	629	1,029	1,551	4,564	7,773	12.0%
	バドミントン	483	711	565	610	2,369	3.6%
	計	11,152	12,901	14,467	18,054	56,574	87.0%
その他の競技	サッカー	469	800	406	312	1,987	3.1%
	ボート	38	0	0	0	38	0.1%
	ホッケー	0	0	0	0	0	0.0%
	セーリング	0	0	0	0	0	0.0%
	自転車	0	0	0	0	0	0.0%
	馬術	0	0	0	0	0	0.0%
	ライフル射撃	0	0	0	0	0	0.0%
	近代五種	40	14	0	0	54	0.1%
	カヌー	0	0	30	0	30	0.0%
	アーチェリー	0	0	0	25	25	0.0%
	トライアスロン	46	131	159	353	689	1.1%
	テコンドー	80	0	0	0	80	0.1%
	パイアスロン	0	0	0	0	0	0.0%
	スキー	143	287	250	300	980	1.5%
	スケート	210	799	140	61	1,210	1.9%
	アイスホッケー	97	122	28	11	258	0.4%
	ボブスレー・リュージュ・スケルトン	24	58	38	0	120	0.2%
	カーリング	0	0	0	0	0	0.0%
	ゴルフ	18	0	0	20	38	0.1%
ラグビー	10	183	359	1,250	1,802	2.8%	
計	1,175	2,394	1,410	2,332	7,311	11.2%	
JISS(研究・測定・医学研究部等)		363	88	250	454	1,155	1.8%
計		12,690	15,383	16,127	20,840	65,040	100.0%

(出典) JSC調べ

NTC対応競技とロンドンオリンピックの競技結果

1. NTC中核拠点がある競技

競技名	ロンドンオリンピック			
	金	銀	銅	入賞
陸上競技(投てき以外)				2
水泳(競泳)		3	8	8
水泳(シンクロナイズドスイミング)				2
テニス				1
ボクシング	1		1	
バレーボール(バレーボール)			1	
体操(体操競技)	1	2		5
体操(新体操)				1
体操(トランポリン)				2
バスケットボール				
レスリング	4		2	2
ウエイトリフティング		1		1
ハンドボール				
卓球		1		4
フェンシング		1		3
柔道	1	3	3	3
バドミントン		1		1

2. 競技別NTCがある競技

競技名	ロンドンオリンピック				競技別NTC指定施設名(所在地)
	金	銀	銅	入賞	
陸上競技(投てき)			1		熊谷スポーツ文化公園陸上競技場付帯投てき場(埼玉県熊谷市)
サッカー		1		1	ジャパンフットボールヴィレッジ(福島県双葉郡楡葉町)
ボート					戸田公園漕艇場及び国立戸田艇庫(埼玉県戸田市)
ホッケー					岐阜県グリーンスタジアム(岐阜県各務原市)
セーリング					和歌山マリーナ(ディンギーマリーナ)(和歌山県和歌山市)
自転車				1	日本サイクルスポーツセンター(静岡県伊豆市)
馬術					御殿場市馬術・スポーツセンター(静岡県御殿場市)
射撃(ライフル射撃)					埼玉県長瀬総合射撃場(埼玉県秩父郡長瀬町)
射撃(クレ射撃)					熊本県総合射撃場(熊本県上益城郡益城町)
近代五種					自衛隊体育学校(東京都練馬区)
カヌー(スプリント)				1	木場潟カヌー競技場(石川県小松市)
アーチェリー		1	1	1	ヤマハリゾート「つま恋」アーチェリー競技場(静岡県掛川市)

3. NTC中核拠点、競技別NTCいずれもない競技

競技名	ロンドンオリンピック			
	金	銀	銅	入賞
水泳(飛込み)				
バレーボール(ビーチバレー)				
カヌー(スラローム)				1
テコンドー				2
トライアスロン				

※ 上記のほかに、NTC競技別強化拠点は、高地トレーニングを指定
(飛騨御嶽高原高地トレーニングエリア(岐阜県高山市、下呂市)、蔵王坊平アスリートヴィレッジ(山形県上山市))

(出典) 文部科学省

マルチサポートによるメダル獲得プロジェクト

(新 規)
24年度予算額 2,746百万円

トップレベル競技者が世界の強豪国に競り勝ち、確実にメダルを獲得することができるよう、メダル獲得が期待される競技をターゲットとして、アスリート支援や研究開発など多方面からの専門的かつ高度な支援を戦略的・包括的に実施する。

また、女性アスリートへの戦略的サポートを実施するとともに、競技者パフォーマンスの最大化に焦点を当て、ロンドンオリンピック競技大会での競技や試合への最善の準備を行う環境を提供するため、選手村村外にスポーツ医・科学、情報面等から総合的にサポートするための「マルチサポート・ハウス」を設置する。

ターゲット競技

- 【夏季競技】 17 競技：陸上競技、水泳(競泳、シンクロ)、サッカー、体操競技(体操、新体操、トランポリン)、レスリング、セーリング、柔道、射撃(ライフル射撃)、テニス、バレーボール、自転車、卓球、フェンシング、カヌー、アーチェリー、バドミントン、トライアスロン
- 【冬季競技】 2 競技：スキー(ジャンプ、ノルディック複合)、スケート(スピード、フィギュア)

アスリート支援

強化合宿や競技大会における動作分析、ゲーム分析、情報収集、栄養サポート、コンディショニングサポート、心理サポートなど、スポーツ医・科学、情報を活用して、ターゲット競技のトップアスリートが試合に勝つために必要なサポートを実施



マルチサポート・ハウス

競技者パフォーマンスの最大化に焦点を当て、ロンドンオリンピック競技大会での競技や試合への最善の準備を行う環境を提供するため、選手村村外にスポーツ医・科学、情報面等から総合的にサポートするための拠点を設置

マルチサポート・ハウス ～情報戦略、医・科学サポートの村外拠点～

分析

- 映像フィードバック
- 映像編集
- 簡易動作分析
- 競技結果集積・分析

コンディショニング、リカバリー

- 栄養補給
- メディカルスペース
- リカバリープール
- トレーニング、心理サポート

情報戦略

- 戦況分析・調査
- 日本選手団との連携・調整
- 現地と日本との連携・調整

コミュニケーション、機器保管

- 選手・コーチ・スタッフのミーティング
- 競技機材の保管
- サポート機器の保管

研究開発

日本の科学技術を活かして、オリンピック選手専用(テーラーメイド型)の競技用具やウェア、シューズ、日本人の弱点を強化するための専用トレーニング器具、コンディショニング、リカバリー方法の研究開発等を実施

女性アスリート戦略的サポート

諸外国に散在している女性スポーツに関する情報のデータベース化や女性アスリートのトランジション研究などを通じて、女性アスリートの戦略的強化方策レポートを作成するとともに、出産、妊娠、育児など女性特有の課題を抱えるアスリートをサポート

(出典) 文部科学省

マルチサポート事業平成24年度ターゲット競技種目

(ターゲットA)

	競技種目名	対 象		
夏季 競技	陸上競技	フィールド	ハンマー投	男子
	水泳	競泳		男子、女子
	サッカー			女子
	体操競技	体操		男子
	レスリング			男子、女子
	セーリング	470級		男子、女子
	柔道			男子、女子
	射撃	ライフル射撃	ピストル	男子
	計8競技8種目			
冬季 競技	スケート	フィギュア		男子、女子
	計1競技1種目			
合計9競技9種目				

(ターゲットB)

	競技種目名	対 象		
夏季 競技	陸上競技	トラック	4×100mリレー	男子
			マラソン	女子
		フィールド	やり投	男子
	水泳	シンクロ		女子
	テニス	ダブルス		女子
	バレーボール	バレーボール		女子
	体操競技	体操		女子
			新体操	団体
			トランポリン	男子
	自転車	トラック		男子
	卓球			男子、女子
	フェンシング	フルーレ		男子
	カヌー			女子
	アーチェリー			男子、女子
	バドミントン			男子、女子
トライアスロン			女子	
射撃	ライフル射撃	ピストル	女子	
計13競技15種目				
冬季 競技	スキー	ジャンプ		男子、女子
		ノルディック複合		男子
	スケート	スピード		男子、女子
計2競技3種目				
合計15競技18種目				

総計19競技24種目

(出典) 文部科学省

ロンドンオリンピック実施競技とJISS、NTC、マルチサポート事業の対応状況及び競技結果

No.	競技名	ナショナルトレーニングセンター(NTC) ●: NTC中核拠点 ▲: 競技別NTC	国立スポーツ科学センター(JISS) 医・科学サポート				マルチサポート事業 ターゲット競技種目	ロンドンの結果			
			H20	H21	H22	H23		金	銀	銅	入賞
1	陸上競技	● ▲(投てき)	●	●	●	●	●(ハンマー投(男子)、4×100mリレー(男子)、マラソン(女子)、やり投(男子))			○	○
2	水泳										
	競泳	●	●	●	●	●			○	○	○
	飛込み	—									
	シンクロナイズトスイミング	●	●	●	●	●					○
3	サッカー	▲		●	●	●	●(女子)		○		○
4	テニス	●	●	●			●(ダブルス(女子))				○
5	ボート	▲	●	●	●	●					
6	ホッケー	▲	●			●					
7	ボクシング	●						○		○	
8	バレーボール										
	インドア	●		●	●	●	●(女子)			○	
	ビーチ	—									
9	体操										
	体操	●		●	●	●	●	○	○		○
	新体操	●		●	●	●	●				○
	トランポリン	●		●	●	●	●(男子)				○
10	バスケットボール	●		●	●	●					
11	レスリング	●	●	●	●	●	●	○		○	○
12	セーリング	▲		●	●	●	●(470級)				
13	ウエイトリフティング	●	●	●	●	●			○		○
14	ハンドボール	●	●	●	●	●					
15	自転車	▲	●	●	●	●	●(トラック(男子))				○
16	卓球	●		●	●	●	●		○		○
17	馬術	▲									
18	フェンシング	●	●	●	●	●	●(フルーレ(男子))		○		○
19	柔道	●	●	●	●	●	●	○	○	○	○
20	バドミントン	●	●	●	●	●	●		○		○
21	射撃										
	ライフル射撃	▲				●	●(ライフル射撃/ピストル)				
	クレー射撃	▲	●	●	●	●					
22	近代五種	▲									
23	カーヌー	▲(スプリント)	●	●	●	●	●(女子)				○
24	アーチェリー	▲	●	●	●	●	●		○	○	○
25	トライアスロン	—	●	●	●	●	●(女子)				
26	テコンドー	—			●	●					○

(出典) 文部科学省

<開催実績>

第1回 平成24年 9月25日（火） 16:00～18:00

第2回 平成24年 10月10日（水） 15:00～17:00

第3回 平成24年 10月24日（水） 13:00～15:00

第4回 平成24年 11月14日（水） 10:00～12:00

ロンドンオリンピックにおける選手育成・強化・支援等 に関する検証チームの設置について

平成 24 年 9 月 18 日
スポーツ・青少年局長決定

1. 趣旨

本年 7 月～ 8 月に開催されたロンドンオリンピックは、ナショナルトレーニングセンターにおけるアスリート育成・強化や、マルチサポート事業によるスポーツ医・科学、情報分野等からのアスリート支援に取り組んで臨んだ初めての大会であった。

今後、2014（平成 26）年に開催予定のソチオリンピックや、2016（平成 28）年に開催予定のリオデジャネイロオリンピックに向け、公益財団法人日本オリンピック委員会や各中央競技団体等における分析・検証等を踏まえつつ、これらの事業の効果等について専門的な分析・検証を行うため、「ロンドンオリンピックにおける育成・強化・支援等に関する検証チーム」（以下、「検証チーム」という。）を設置する。

2. 検討事項

- (1) ロンドンオリンピック競技大会の競技結果の分析・検証
- (2) 国立スポーツ科学センター、ナショナルトレーニングセンター、マルチサポート事業によるアスリート支援の効果に関する分析・検証
- (3) その他必要な事項

3. 構成

- (1) 検証チームは、別紙に掲げる委員をもって構成する。
- (2) 検証チームに座長を置き、委員の互選により選任するものとする。
- (3) 必要に応じて、委員以外の協力を得ることができる。

4. 設置期間

平成 24 年 9 月 18 日から平成 25 年 3 月 31 日までとする。

5. その他

本件に関する庶務は、スポーツ・青少年局競技スポーツ課において行う。

ロンドンオリンピックにおける選手育成・強化・支援等
に関する検証チーム委員

- | | |
|--------|--|
| 朝原 宣治 | 一般社団法人アスリートネットワーク副理事長 |
| 北村 信彦 | 公認会計士 |
| 柴田 亜衣 | アテネオリンピック金メダリスト |
| 平尾 誠二 | 神戸製鋼ラグビー部ゼネラルマネージャー兼総監督、特定非営利活動
法人スポーツ・コミュニティ・アンド・インテリジェンス機構理事長 |
| 平野 祐司 | 一般社団法人日本トップリーグ連携機構事務局長 |
| 間野 義之 | 早稲田大学スポーツ科学学術院教授 |
| 宮嶋 泰子 | 株式会社テレビ朝日編成制作局アナウンス部兼編成部上級マネジャー |
| ◎山口 泰雄 | 神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授 |
| ◎：座長 | |

※協力員

- | | |
|-------|-----------------------|
| 上村 春樹 | 公益財団法人日本オリンピック委員会常務理事 |
| 河野 一郎 | 独立行政法人日本スポーツ振興センター理事長 |

平成 24 年 9 月 25 日現在

※五十音順（敬称略）

